



発行●大妻女子大学人間生活文化研究所

No. **11**
2019

CONTENTS

人間生活文化研究所の研究支援に感謝 ～研究助成・競争的外部資金の獲得支援を活用して～ ……	1
協賛企業 ……	1
人間生活文化研究所 平成30年度共同研究プロジェクト 要望課題を紹介します ……	2
特別展 東南アジア狩猟採集民の生活と子どもの発育発達 ……	5
「科研塾」が開催されました ……	5
オンラインジャーナル『人間生活文化研究：International Journal of Human Culture Studies』 ……	6
お知らせ ……	8
人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー 2019 ……	8

人間生活文化研究所の研究支援に感謝 ～研究助成・競争的外部資金の獲得支援を活用して～

この原稿を書くにあたって、人間生活文化研究所のホームページを眺めて、事業内容が多いことを改めて認識した。メインページには、「研究費助成事業」「競争的外部資金の獲得支援に関する事業」「電子出版事業」「産学共同研究」「国際学術研究・協力・交流」「研究員・研修生の受け入れ」「イベント」と並んでいる。これらの中で、最近身近になったのが、「研究費助成事業」と「競争的外部資金の獲得支援事業」である。研究をしっかりと自分自身にスイッチを入れてみたところ、これら学内研究助成事業があり、科研塾で科研費獲得をサポートする仕組みは、実に役に立った。戦略的個人研究費は、科研費取得に向けて良い助走になったし、共同研究プロジェクトは他の先生と一緒に取り組

む際の基盤になりそうだ。実際に科研塾には2回参加したが、審査の傾向や具体的な書き方のノウハウを教えてもらい、目から鱗だった。多摩キャンパスで1回開催されたことも有難かった。

これだけ多くの事業があるのだが、大澤所長の下、実に少人数で運営していることを知り、大変驚いている。1つの秘訣は、人間生活文化研究の電子出版など、効率的なシステムが構築されていることであろう。少人数で回せるもう1つの秘訣は、言うまでもなくスタッフの献身的な働きであろう。表に出ることは少ないが、裏方を支えているスタッフに改めて敬意を表し、感謝を申し上げたい。

このように運営面にも目が行ってしまうのは、来年度より人間関

係学部において、「共生社会文化研究所」を設立することになっていることがある。共生社会の実現に資する研究の推進、若手研究者の育成を行いながら、多摩キャンパスを活性化したいと考えている。事業内容、運営の仕組みなど、人間生活文化研究所から学ぶべきことが多すぎて、背中さえ見えないのが正直なところである。改めて、その実績とこれまでのご努力に敬意を表しつつ、共生社会文化研究所も頑張っていきたいと思う。



大妻女子大学
人間関係学部長
小川 浩

【協賛企業】 人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいています

前田建設工業株式会社
清水建設株式会社
ダイダグ株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社九電工
山崎製パン株式会社

株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社オカムラ
富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
キユーピー株式会社

東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行
SMBC日興証券株式会社

(順不同、平成31年2月現在)

研究課題

日本国外における大妻学院のブランディング -『ごもくめし』の広報ツールとしての可能性-

〈研究代表者〉伊藤 みちる

国際センター



本研究は、『ごもくめし』の内外での広報効果の可能性を探るものです。昨年度の英語版『ごもくめし』制作に続き、今年度は写真とキャプションを追加し、大妻学院の歴史が手に取るようにわかる読み物としてさらに魅力を高めた中国語版『ごもくめし』の改訂版を制作いたしました。

『ごもくめし』は大妻コタカ先生が77歳の記念に、大妻学院の歴史や教育理念、またコタカ先生ご自身がお生まれになってから77歳になるまでの、一人の女性としての人生の様々なできごとなどを記されたものです。コタカ先生の、様々な

苦境にも負けず学校創設に奔走した姿や、生徒へ向けた温かなまなざしなど、大妻の礎をみることができます。

外国から日本の大学へ留学を希望する学生たちが、大妻女子大学への留学を希望してもらえるように、また大妻女子大学に留学を始めた留学生たちに大妻女子大学の歴史や教育理念を知ってもらい、他大学ではなく大妻女子大学に留学して良かったと思ってもらえるように、広報ツールとして活用する予定です。明治時代に生きた日本人女性としてコタカ先生が経験した様々なことがらは、現代を生きる我々

日本人にとっても驚きの連続です。まして韓国・中国などからの留学生にとっては、異文化理解を促す事例として、とても新鮮に見えるでしょう。

少子化により若者の減少が深刻化する日本で、特に中国の優秀な留学生は貴重な存在となっています。大妻女子大学の学生も中国からの留学生と机を並べることで、自分が置かれた環境を再認識し、世界を多角的に見ることができるといえるでしょう。そのような可能性を探り、実現に一步近づきかけとなれば幸いです。

研究課題

機能美に特化した 身障者と健常者が「共有できる服」の開発研究Ⅲ

〈研究代表者〉大網 美代子

家政学部



現在、流行現象により目まぐるしく消費される衣服がある一方、身体に障害がある人たちが欲しい衣服が手に入らない現状が挙げられる。そこで、誰もがおしゃれを楽しむことができる環境を目指して、機能美に特化した健常者と身障者が「共有できる服」の研究をしている。本研究は身体に障害がある人たちの衣服に関する不満から学び、日本のアパレル業界の現状を踏まえて「共有できる服」を健常者側に展開し、おしゃれの共有（障害の有無に関わらず、おしゃれを楽しめること）を図ると

いうものである。今までにないアプローチであり、新しいマーケットの創造が期待できる。また、研究の基礎段階のデザイン制作は、「主体的な学びのためのデザインシステム」の研究と連動させ、学生と共に実践をしている。PBL型授業では課題に対する提案や問題解決を行い、学生の時代感覚や感性が活かされる場となる。現在、着脱のしやすさ、股義足・装具や肩義手使用による可動域への対応、車椅子の座位姿勢に対応した衣服の体系的なデザインとパターンの考え方をまとめている。

本学創立者である大妻コタカ先生の実技実学教育は、社会へ貢献できる人材育成のための実践的教育であり、現在でも変わることはない本質である。本学の実技実学の不易流行の1つの形を実現するための場として、研究と教育を連動させた「Otsuma 創成工房」を設置し、研究を継続しながら、その成果を社会に発信をしていきたいと思う。

大妻女子大学博物館を活用した大学教育

〈研究代表者〉小井土 守敏

文学部



本学の財産としての貴重書や典籍は、本学の学生がそれを目にし、本学の教育に活かされてこそ、その価値があると考えている。これまでに、文学部日本文学科・短期大学部国文科主催の貴重書展示を中心に小規模な展示に関わってきたが、平成29年度に、本学博物館学芸員であり本研究課題の共同研究者である榎崎修一郎氏、人間生活文化研究所助手で同じく共同研究者の東條沙織氏の協力を得て、「大妻女子大学日本文学関係貴重書展示」を本学博物館において開催することができた。

会期中、多くの本学学生が訪れ、その実物に接することができたことは特に大きな成果であった。また、授業の一環として、この貴重書展示を活用してくれた教員があったことは特筆すべきことであり、こうしたことが、博物館と大学教育との連携、本学の教育における大妻女子大学博物館の活用について具体的に考える契機となった。そこで、大学・短期大学教育における博物館の利用の実態について調査したうえで、これを本学の教育に対する学生のニーズとして受け止め、さらなる本学博

物館の教育上の活用のあり方を探り、博物館の一層の利用を促す契機とすべく、本研究課題を設定したのである。あわせて、この取り組みが本学における大学教育の価値とその位置づけを向上させる一助となることを期待する。まずは本学博物館利用者の実態調査について、オンラインジャーナル『人間生活文化研究：International Journal of Human Culture Studies』No. 29 (2019)において報告する予定であるので参照されたい。

大妻女子大学博物館の施設と所蔵資料を活用した大学教育の可能性に関する基礎的研究

〈研究代表者〉是澤 博昭

博物館



大妻女子大学博物館の主な活動は、これまで展示公開と館園実習施設に集約されたために、博物館施設及び所蔵資料をとおした学内教育への利用は、必ずしも活発におこなわれてこなかった。

本研究は、生活文化という視点から人間の営みを解明するために、文献資料とともに物質資料を照合し検証する研究に理解がある学内の研究者が集まり、本学博物館の活用について多方面から検討し、建学理念と今後の女子教育あり方を視野にいれた教育システムを構築することを最

終的な目的としている。その第一歩として、本学博物館の活用の可能性をさぐるための基礎的な整理と検証をおこなっている。

まず他大学博物館の現状を把握するために、博物館運営と大学との連携という問題を中心に、設備・人的資源・企画展やイベントと授業との関係・教員、学生の関わり、地域貢献等の視点から、東京家政大学・武蔵野美術大学・京都工芸繊維大学・関西学院大学の各博物館の担当者から聞き取り調査を実施した。

さらに現在、本学学生の大学博物

館の認知度と利用の実態、および展覧会・イベント・ワークショップへの興味関心、他の博物館・美術館の利用など、700枚程度のアンケート調査に着手している。これによって学生の現状と傾向を把握するとともに、他の大学博物館との比較検討を行うための基礎資料作成することを目指している。

これらをもとに来年度以降の方向性を、各共同研究員間で共有したいと模索している。

研究課題

大妻精神の継承と具現 —聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る 3—

〈研究代表者〉高垣 佐和子

博物館 大妻コタカ・大妻良馬研究所



大妻コタカが果たしてきた役割を明らかにすべく、平成28年度から大妻コタカに関わった方々への聞き取り調査研究を実施。本年度は、これまでの調査から得た研究成果と寄贈された授業製作品など約150点を基とした「大妻コタカの生涯と大妻学院の歴史」と題して、大妻コタカの故郷である広島県世羅町『大田庄歴史館』で展示をし、来館者から新たな情報を集めることとした。

展示は、平成30年9月末から10月初旬の7日間、世羅町及び世羅町教育委員会の後援、世羅町長が代表

を務める大妻コタカ先生顕彰会と一般財団法人大妻コタカ記念会の共催をいただき開催した。

イラストを交えた「困難を切り抜ける力を育んだ幼少期」、「働く子女らの教育にも尽力をしたこと」などのパネル展示は分かり易いとされ、昭和10年代に村岡花子・与謝野晶子・柳原白蓮など時代を行く女性と共に活躍をした写真パネル展示からは、何の後ろ盾も無く東京で活躍をした大妻コタカの偉業に多くの方が関心を寄せていた。更には当該展示について新聞報道でも取り上げられ

「大妻」を広く知っていただく好機となった。

展示を通じ、当時存在した町立大妻女子専門学校で学んだ方々、世羅町旧久恵集落の方々などに出会うことができた。今後の研究調査を発展させていくために、聞き取り調査及び実地調査を順次進めていき、学内外に大妻コタカが果たしてきた役割を明らかにし、『大妻精神の継承と具現』に務めていきたい。

研究課題

「大妻らしさ」と快適な学生生活に対する 学生意識の調査

〈研究代表者〉中川 麻子

家政学部



将来を見据えて学ぶ4年間の大学生活は学生にとって重要な期間であり、これに大きな影響を与える大学環境の充実が求められている。110周年を迎えた本学は、女子教育の先駆的存在として社会的評価を受けているが、実際に学ぶ学生たちにとって魅力的な学びの場であるのか、また学生自身が期待する「大妻らしさ」とはどのようなものだろうか。本研究は学生生活全般と入学前後で発生する本学に対するイメージギャップに注目するものである。

現在、全学部の学生を対象に質問

紙調査と、被服学科を中心に学生インタビュー調査を行うと共に集計を進めている。本学のイメージは「明るい」「活発」等のポジティブなイメージが強く、「施設のきれいさ」に満足している学生が多い。また「もっと授業を取りたい」という学習に対する積極的な姿勢が見られる。一方で女子大学特有の問題や学生イベント・サークル活動等に対する不満も上がっている。インタビューでは被服分野の学びに関する具体的な意見や、大妻生が望む大妻女子大学のイメージなど、具体的な

意見を集めることができている。引き続き集計と分析を行い、大妻生が感じる「大妻らしさ」と快適な学生生活について明らかにすることで、将来的な大妻ブランディングの一助とすることを目標としている。

「大妻精神」をこれからの100年に伝えるための 「言葉の玉手箱」としての「大妻かるた」の選定および作成

〈研究代表者〉松木 博 短期大学部



110周年を記念する企画を学科で検討していましたが、100年後の本学はどのように展開しているだろうという話題になり、タイムカプセルに映像や資料を入れて100年後の学生が開くという趣向も良いな、という意見が出ました。

たしかにそれも興味深くはあるけれど、100年間ずっと貯蔵されているより、創立から現在までの大妻学院のありさまを「大妻かるた」にして、卒業生の祖母と母と娘とが男性の家族といっしょに「かるた取り」を楽しむ姿が良いと、この企画に

なった次第です。

まず学生から「読み札」の文言と「絵札」を募集し、夏休みを挟んで100以上が集まりました。学生が主体となって「読み札」をセレクトし、もう一つのプロジェクトチームが「絵札」を担当して、言葉・画像それぞれが大妻学院を思い出させる、「究極のかるた」の完成を目指しています。以下に現在進行中の候補作を挙げます。

あ あつあつの大妻カレーはコタカフェで
こ 校章の裏に刻まれた「恥を知れ」

な 和やかな教えの庭は三番町
は 始まりは和裁、手芸の伝習所
ほ 放課後にライブに行こうよ武道館
ら 来年も咲くのを待つよ佐野桜

いかがですか？かるたとして読み上げられた札を取るごとに、母校が脳裏に浮かんでくるのではないでしょう。

大妻学院 創立110周年 記念事業イベント 大妻女子大学人間生活文化研究所 特別展 東南アジア狩猟採集民の生活と子どもの発育発達

■会期：平成31年3月4日(月)～5月18日(土) 10時～16時30分

■会場：大妻女子大学博物館

東京都千代田区三番町7-8図書館棟地下1階(区立九段小学校前) Tel: 03-5275-5739
<http://www.otsuma.jp/otsuma110/news-detail.php?id=4>

■共催：国立民族学博物館(大阪府吹田市) ■後援：駐日ミャンマー連邦共和国大使館

会期中のイベント

●講演1 日本発育発達学会会長講演 大澤 清二

アジアの山地民、狩猟採集民の子どもはどのように育つのか -発育発達科学研究の45年-
日時：3月9日(土)10時～11時45分 場所：大妻女子大学A棟150室(東京都千代田区三番町12)

●講演2 大妻女子大学図書館ラーニングコモンズイベント 大澤 清二(大妻女子大学人間生活文化研究所所長)

将来の日本人の身体はどうなるのか -狩猟採集民、山地民の生活から日本人の未来を予想する-
日時：4月20日(土)13時～15時 場所：大妻女子大学図書館(東京都千代田区三番町7-8)

[イベントに関するお問合せ] 大妻女子大学人間生活文化研究所 03-5275-6047



かつて幻の民といわれたムラブリの青年たち

「科研塾」が開催されました

人間生活文化研究所では、大妻女子大学教職員、大学院生、研究所研究員等を対象に、研究支援室、総務・財務グループと協働で科研費申請講座「科研塾」を開催しています。

2018年10月3日に開催された、平成31年度科学研究費「研究計画調書」の提出直前の科研塾には、多くの方々にご参加いただきました。

講師の久保陽介氏(一般社団法人先端科学技術研究支援協会 理事長)から、平成30年度、31年度と行われた科学研究費助成事業の変更点について詳細な解説が行われました。特に、大幅に変更された研究計画調書の様式について、どのように対応をするか等のポイントをご教示いただきました。

*人間生活文化研究所では、申請内容に関する相談や、専門家による申請書類の添削を随時受け付けています。是非ご利用ください。

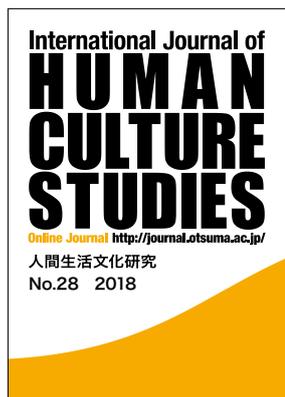
Tel : 03-5275-6047(千代田キャンパス内線 : 5650~5652) 電話問い合わせ時間 : 10時~17時 E-mail : info@o-ihcs.com



スポーツフェスティバル後、26名の方にご参加いただきました。

オンラインジャーナル

『人間生活文化研究：International Journal of Human Culture Studies』



本誌では「人間の生活と文化」に関わる研究論文の投稿を随時募集し、これまでに250編を超える論文を掲載してきました。スコープは、被服学、食物学、児童学、ライフデザイン学、日本文学、英文学、コミュニケーション文化学、社会情報学、人間関係学、人間福祉学、比較文化学など広範囲にわたります。平成31年1月から縦書き論文の受け付けを始めました。

以下、一覧をご参照ください。

【ご案内】本誌「原著論文」「短報」のピア・レビューについて

査読付き論文（原著論文、短報）の投稿時に、投稿者は査読候補者3~5名を推薦できます。但し、同一研究室の研究者や師弟関係にあたる研究者などの利害関係者を除きます。推薦された査読者は査読者選定の参考にします。



投稿については下記をご覧ください。
<http://journal.otsuma.ac.jp/>

No.28 (2018) 掲載論文一覧

■ 原著論文

論 題	著 者
児童英語教育における人間の成長の軌跡 —natural discourse のインタラクション分析に基づいて—	渡邊 万里子 (大学院)
The necessity of 'Hifumi Gymnastics' for Japanese children in physical education and recreation	Hitomi Imanishi (Tokyo Management College) et al.
What postcards want to say	Sanae Tokizane (Faculty of Language and Literature)
The growth of height in early childhood determines the height of Japanese people (From the school health survey, 1900-2017)	Seiji Ohsawa (Institute of Human Culture Studies) et al.
新学習指導要領「カリキュラム・マネジメント」と中学校漢文教材選択刷新の可能性について —複数教科連携による漢文教材の多様化—	戸高 留美子 (東京学芸大学)
旧英領カリブ海地域における白人性の多様性 —バルバドスとトリニダートの比較—	伊藤 みちる (国際センター)
Acceleratory effect of ellagic acid on sarcoplasmic reticulum Ca ²⁺ uptake and myocardial relaxation	Iyuki Namekata (Toho University) et al.
長期的視座で捉える青年海外協力隊による日本語教育 —ブルガリア・ジャマイカ・ベトナムの三学習者の事例研究—	伊藤 みちる (国際センター)
A single simultaneous injection of two monoclonal antibodies causes novel progressive renal lesions with characteristic proteinuria kinetics	Yumiko Fujioka (Matsumoto University) et al.

■ 短報

論 題	著 者
看護師のヒューマンエラーによる医療事故に関する事例研究	加藤 淳 (愛知学院大学)

■ 報告

論 題	著 者
植物の組織特異的な発現における最適な組織固定の探究	手呂内 伸之 (人間文化研究科)
「お悔みの手紙」に見られる裏返し構造 —物語とは言えないテキストの場合—	大喜多 紀明 (京都民俗学会)
保育・教育課程の編成目的と方法に関する考察 —テキストにおける記載内容に注目して—	杉山 実加 (白梅学園大学)
教育界のグローバル化とレクチャーの英語力の養成を目指す教授媒介としての英語研究	井上 美沙子 (大妻女子大学) ほか
ヴィゴツキーの文化・歴史的理論とロシアの補充教育	森岡 修一 (文学部)
アメリカと日本の架け橋に —パール・バック『天津波』と戦後冷戦期日米文化関係—	鈴木 紀子 (文学部)
学習を可視化する e ラーニングの実証的取り組みの報告 —大妻マネジメントアカデミーにおける実践—	井上 俊也 (キャリア教育センター)
知的障害特別支援学校の教育課程における個別の指導計画と学習指導案の作成方法 —子どもが主体的に学ぶ授業づくりを目指して—	藤澤 憲 (和歌山さくら支援学校)
世代間比較による友人関係の特徴について	本田 周二 (人間関係学部)
女子大学生のキャリア意識 学年差および理想とするライフコース別の検討	戸田 里和 (人間生活文化研究所) ほか
学校の先生と取り組む手作り教材の制作と教育実践	生田 茂 (社会情報学部) ほか
英文学系授業における学修成果の可視化について	武藤 哲郎 (短期大学部)

論 題	著 者
ボーイスカウトの夏季キャンプ参加が生きる力、リーダーシップ、および、自尊心に与える影響	田中 優 (人間関係学部)
17世紀フランス王太子の教育にみる古典ラテン喜劇作家の位置づけ	榎本 恵子 (文学部)
知的障害特別支援学校における情報教育としての絵本活用の取組の成果と課題 —情報活用能力と自立・共生・社会参加に視点を当てて—	藤澤 憲 (和歌山さくら支援学校)
地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究 —平成29年度の「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」の展開—	千川 剛史 (人間関係学部)
男性の女性性からみた身体像不満足感および食行動の問題の関係	山蔦 圭輔 (人間関係学部)
組織不祥事と大学経営	加藤 淳 (愛知学院大学)
ハワイ語新聞と19世紀末の日本に関する紀行文 —D・ケアヴェアマヒと後藤医師親子—	古川 敏明 (文学部)
女性管理栄養士が有するキャリア発達上の課題 —自尊感情と自己効力感に注目して—	彦坂 令子 (家政学部) ほか
关于中国没有形成茶道流派之分析	趙 方任 (国際センター)
対抗的記憶とナショナリズム	五味洲 典嗣 (文学部)
不登校指導における一提言 —短期間で不登校から登校に至った中学生Aの事例を通して—	森近 利寿 (ISNA 日本スヌーズレン総合研究所)
各県教育委員会・協議会の保幼小接続に関する手引きの比較分析 —東海四県の実践状況に着目して—	杉山 実加 (名古屋女子大学) ほか
再登校に向けた観点から —5つの事例を通して—	森近 利寿 (ISNA 日本スヌーズレン総合研究所)
素質教育と传统文化及国民性格の関係	趙 方任 (国際センター)
初年次教育における能動的学修の効果	杉本 亜由美 (金沢学院短期大学)
異文化間コンフリクトへの対応に関する考察 —接客を主な業務とするアジア人ビジネスパーソンを対象として—	杉本 亜由美 (金沢学院短期大学)
学校教育で実施可能なポリフェノールの簡易定量法の提案	谷本 憂太郎 (北海道大学) ほか
『ごもくめし』と2017年度の留学生	伊藤 みちる (国際センター)
中国のテレビドラマ批評に関するメタ批評研究 —現代の社会思潮の影響を視野に考察する—	王 玉輝 (北海道大学) ほか
EU 研究に歴史的制度主義を適用する方途についての試論 —域内市場統合を事例に—	井上 淳 (比較文化学部)
カリブ社会のグローバル化とグローカル化 —トリニダードのカーニバルを事例に—	伊藤 みちる (国際センター)
「考える道徳」「議論する道徳」のコンステレーション —カリキュラム・マネジメントの視点から—	高野 成彦 (教職総合支援センター)
道徳における資料選定について	森近 利寿 (ISNA 日本スヌーズレン総合研究所)
理科授業におけるアクティブ・ラーニングによる課題解決学習	森近 利寿 (ISNA 日本スヌーズレン総合研究所)

■ 資料

論 題	著 者
「ルカによる福音書」全体における裏返し構造	大喜多 紀明 (滋賀民俗学会)
インターンシップへの参加が学生の意識の変化に及ぼす影響	本田 周二 (人間関係学部)
緑地保全活動が市民ボランティア、企業社員、NPO 法人スタッフの心理に与える影響	甲野 毅 (家政学部)
PDCA サイクルに基づくスヌーズレン実践計画における指導の教育的意義 —重度・重複障害児の主体的な追視や手の動きに着目して—	藤澤 憲 (和歌山さくら支援学校)
大学での英語教育におけるクリティカル・シンキング力を育成するための研究	服部 孝彦 (英語教育研究所)
ルカによる福音書 9章51節～19章46節にみられる裏返し構造 —対称性仮説に関する検証に向けて—	大喜多 紀明 (滋賀民俗学会)
目視評価と色情報の解析によるポリフェノール分析教材の提案	谷本 憂太郎 (北海道大学) ほか

『人間生活文化研究：International Journal of Human Culture Studies』の投稿査読状況

オンラインジャーナル『人間生活文化研究』は、平成24年の創刊以来、250編以上の「人間の生活と文化」に関わる研究論文を迅速に掲載し、世界に発信し続けております。

平成24年6月から平成30年12月までの査読付き論文「原著論文」「短報」、査読なし論文「総説」「報告」「資料」の論文採択率と投稿受付から掲載決定までの平均期間は右の通りです。

なお、投稿された論文に対しては編集委員会を開催し、査読なし論文についても、編集委員会の意見に基づいた修正等をお願いすることがあります。

研究成果の発表、公開の場として、是非今後ともご活用ください。論文のご投稿をお待ちしております。

	採択率	掲載決定までの平均日数
査読付き論文 原著論文・短報	62.9%	114.0日
査読なし論文 総説・報告・資料	92.3%	16.7日

お知らせ

大妻女子大学 地域連携プロジェクトへの協力

平成30年度地域連携プロジェクト「神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト（代表：深水浩司先生）」（地域連携推進センター）の一環として、平成30年10月26日、八木壯一氏（八木書店会長）による講演会「古書を知り、古書を楽しむ 書物と神保町の歴史を学ぶ」が、人間生活文化研究所セミナールームで開催されました。古書の流通、神保町の歴史と今後のまちづくり等の話題について、貴重な写真や資料を交えて魅力的な古書と神保町の世界について教えて頂きました。



八木会長の講演の様子

ミャンマー友好イベントが 大妻女子大学で開催されました！

平成31年1月19日に日本とミャンマーのさらなる友好・親善を願って、一般社団法人日本ミャンマー友好協会（主催）と人間生活文化研究所（共催）がミャンマー友好イベントを開催しました。大澤清二所長の講演「アングマン海の狩猟採集民 サロン（モーケン族）調査」と下田敦子講師の講演「カヤン（首長族）の最新データ」に続き、ミャンマー映画『ラッパン女と男の激情』の上映が行われ、ミャンマーの風土や文化を知る機会となりました。



大澤所長の講演の様子

人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー 2019

	科研費申請講座「科研塾」	戦略的個人研究費	共同研究プロジェクト	研究員研究助成	大学院生研究助成(A)(B)
	●平成31年度申請対象		■平成30年度採択者対象		
2月			●1.31 平成31年度応募受付開始(2.21迄)		●2.20 平成31年度公募要項等公開(応募受付は4月から)
3月	●初旬 日本学術振興会「研究活動スタート支援」公募	●上旬 平成31年度公募要項等公開(応募受付は4月)	■2.12 各依頼書等の提出締切(17時迄)(平成30年度)		■3.8 「収支等実施報告書」提出期限(平成30年度)
		■3.15 「収支等実施報告書」提出期限(平成30年度)	■3.22 「研究実施報告書」提出期限(平成30年度)		■3.19 「研究実施報告書」提出期限(平成30年度)
4月	●初旬 日本学術振興会「基盤研究」「挑戦的研究」「若手研究」等交付内定通知	●初旬 平成31年度応募受付開始(下旬頃迄)	●上旬 平成31年度採択課題決定		●初旬 平成31年度応募に関するガイダンス：新入生対象
	●4.5 平成31年度 第1回「科研塾」		研究活動開始		●初旬 平成31年度応募受付開始(5月上旬頃迄)
5月					
6月		■6.13 研究成果報告(「資料」)投稿期限(平成30年度)			
		■6.27 研究成果報告(「報告」)投稿期限(平成30年度)			
7月	●上旬(予定) 第2回「科研塾」：平成32年度科研費獲得に向けて	●初旬 平成31年度採択課題決定			●初旬 平成31年度採択課題決定

※このカレンダーについてのお問い合わせ先は、☎03-5275-6047(千代田キャンパス内線5650)です。



大妻女子大学人間生活文化研究所

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地 大妻女子大学図書館棟6階
 Tel: 03-5275-6047 Fax: 03-3222-1928 E-mail: info@o-ihcs.com
 HP : <http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/>



▶ ニュースレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。

※ このニュースレターは、全国の大学・大学院、企業研究所、研究助成団体、官公庁などの関係機関に、およそ1,900部発送し、配布しています。